

福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	2023年度看護学部学術委員会活動報告：学内活動
Author(s)	高瀬, 佳苗; 佐藤, 富美子; 森, 努; 林, 紋美; 立柳, 聡; 山口, 咲奈枝; 吾妻, 陽子; 川島, 理恵; 渡邊, まどか
Citation	福島県立医科大学看護学部紀要. 26: 21-23
Issue Date	2024-03
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/2218
Rights	© 2024 福島県立医科大学看護学部
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-05-10T04:12:45Z

学 内 活 動

2023年度 看護学部学術委員会活動報告

学術委員会

I. はじめに

学術委員会は、看護学部が1998年に開設されてから、国内外の学術交流の方針やあり方に関すること等を審議し、看護学の学術向上に寄与すべく活動を行っている委員会である。この25年間に若干の変遷はあったが、その活動では、大きく学内学術交流推進小委員会、学外学術交流推進小委員会、そして研究活動広報小委員会の3つに分かれている。これらの小委員会の活動の実際は、紀要において学術委員会活動報告として継続して発表されてきた。今年度は、看護学部開設25年の節目にあたり、研究の質を高める学内学術交流小委員会の活動報告、看護学の学術向上のために協働した学外学術交流小委員会と研究活動広報小委員会の合同の報告を行う。

II. 活動紹介

1. 学内学術交流推進小委員会

本小委員会の活動目標は、1. 教員個人の研究活動の活性化に資する、2. 学部教員間の研究交流を促進する、3. 学部教員間の共同研究を推進する、の3点である。今年度の活動方針は、看護学部教員の研究をさらに推進するために、昨年度に引き続き「My プレミアムを語る会」の企画・運営とした。

「My プレミアムを語る会」は、本学部教員が取り組んでいる研究・実践・教育活動について語り合い、互いに刺激しあったり、学んだりすることで、教員の学術活動を推進する原動力になることを期待するものである。今年度は、昨年度開催後の「My プレミアムを語る会」参加者を対象としたアンケート結果を参考に企画した。

(1) 第1回「My プレミアムを語る会」

日 程 2023年6月15日(木) 16:30~17:30

テーマ 「科研費獲得に向けて。私たちはこのように申請書を書きました！」

演 者 成人・老年看護学部門 准教授

菅野 久美 先生

基礎看護学部門 准教授 丸山 育子 先生

(2) 第2回「My プレミアムを語る会」

日 程 2023年12月15日(金) 17:00~18:00

テーマ 「研究実践より得られた成果」

演 者 生命科学部門 准教授 森 努 先生

第1回の「My プレミアムを語る会」は、今年度科学研究費の新規交付が決まった本学部教員から科研費獲得の勝因について聞きたい、また、講演という形式ではなく、2017年「My プレミアムを語る会」開始当初のように、8号館5階ラウンジで演者の体験を中心に交流する会で企画してほしいという要望をもとに企画した。当日の参加者は33名で、質疑応答も活発にあり、盛会であった。企画評価のアンケートには、「ラウンジでざっくばらんに話せる和やかな雰囲気でもとても良かった」、「研究計画書作成のヒントになった」、「大変分かりやすい講演で、今年の(科研)申請に活かしたい」などの感想が多かった。第2回は、研究の意義を問うテーマであり、参加者は26名であった。情報理論に基づく「影響力」を応用して物理学を統一する試みと、免疫チェックポイントKYNUの新規発見についてであった。参加者のアンケート中の自由記述には「大変難しく、わかるにも至らなかったが、わからない世界にふれることは、好奇心を刺激される機会でもあり、大変充実した時間であった」や、研究シーズをみだし、新規成果の獲得に発展させていくプロセスは、専門領域を超えて多くの示唆が得られたという感想がみられた。これらの評価から、今年度2回実施した「My プレミアムを語る会」のねらいは達成できたと考える。

「My プレミアムを語る会」が教員間、教員と学生間でお互いの研究活動について語り合える機会となり、研究活動に貢献できるように、参加者の反応を中心に本年度企画を評価し、次年度の計画に活かしていきたい。

2. 学外学術交流推進小委員会

本小委員会は、学外の関係者との共同で、看護学部の学術振興に寄与するとみられる活動を企画、実現させることを目指している。こうした観点から、2022年度に、学内看護学会の設立に向けて、課題や設立によって可能となるとみられる取り組みなどを検討するシンポジウムを開催した。2023年度は、その成果を引き継ぎながら、看護学部設立から25周年の節目でもあることから、その

歩みを振り返りつつ、今後の研究と実践の振興策、卒業生との共同などを検討するパネルディスカッション「学部開設から25年の歩み—臨床で見つけた実践と研究の種を育む—」を、8月5日、学内にて開催した。なお、25周年記念の特別な意義を持つイベントでもあることから、研究活動広報小委員会の積極的な協力を得て、大学ホームページに記事を掲載するなど、多くの県内関係者に周知し、参加を促すPR活動に力を入れて取り組んだ。以下、概要を報告する。

(1) パネルディスカッションの内容

パネルディスカッションの参加者は、学内関係者、学外関係者(22名)の合計47名であった。5名のパネリストをお迎えし、初代学部長の中山洋子名誉教授からは、看護学部開設までの経緯、附属病院との協働について、高橋香子看護学研究科長からは、ふくしま看護モデル検討部会の活動状況について、佐藤富美子特命教授からは、学部開設より本学部の発展を見守り支援してきた経

緯についてご講演いただいた。また、看護学部1期生の湯田満希氏(虎の門病院師長)からは、大学時代のグループワークを通して培った力が現在の自分を支えている事、7期生の菅野秀氏(訪問看護ステーションドレミファ管理者)からは、大学時代での学び、看護師経験での迷い、看護学研究科で見つけた自身の目標と現在の活動についてご講演いただいた。

講演の後のディスカッションでは、さまざまな視点からの意見が出された。本学部は、昨年度より学内看護学会の設立に向けた議論を行っているが、設立が拓く可能性と課題について多々意見が交換された。そして何よりも、大学が卒業生と連携できる機会や卒業生同士が交流できる場を設けることの大切さを確認した。

(2) 学内看護学会設立に関する検討

① 2022年度シンポジウム開始前後のアンケート結果

表1 学内学会設立に関するアンケート結果

(単位：%)

質 問 内 容	シンポジウム開催前 (n=28)		シンポジウム開催後 (n=11)	
	とても思う やや思う	あまり思わない まったく思わない	とても思う やや思う	あまり思わない まったく思わない
看護学部の研究の発展に貢献する	78.6	21.4	63.6	36.4
県内の看護の発展に貢献する	78.6	21.4	81.8	18.2
大学教育の発展に貢献する	71.4	28.6	81.8	18.2
大学院生が発表する機会が広がる	71.4	28.6	90.9	9.1
看護職者が発表する機会が広がる	67.8	32.1	81.9	18.2
研究プロジェクトがあれば参加したい	60.7	39.3	45.5	54.6
研究成果を発表したい	28.5	71.3	54.5	45.5
学内学会誌があれば投稿したい	32.1	67.9	45.5	54.6

〈自由記載の内容〉

- 学内学会の運営力、学部関係者の意識、協調性などが課題としてあがっていた。
- シンポジウム開催前は、意義や目的、理念などを明確にしてほしいという意見があったが、開催後はこのような意見はなかった。

② 2023年度パネルディスカッション後のアンケート結果

学内学会が本学部および県内の看護の発展に貢献するためのアイデアをめぐるパネルディスカッション後のアンケート結果（n=30）は、以下のとおりであった。

- 同窓会と連携して研究会から始める。
- 「場」があるとういことは大事かと思う。
- 現在、福島の在宅の現場で活動する立場として、ぜひ学部とつながって現場の実践を伝えたり、コラボしたり、研究のサポートをしていただけたらいいなと思う。
- 市民講座や出前講義などの地域貢献活動の側面から会を運営する。

③ 本委員会による学内看護学会設立の方向性

学外学術交流推進小委員会では、今後の学術交流のあり方の一つとして学内学会の必要性について、2022年度シンポジウムと2023年度パネルディスカッションの実施、アンケートによる参加者の意見整理など複数の側面から検討機会を提供してきた。これらをもとに、学術委員会委員全員での議論を重ね、看護学の学問の独立性、看護学教育の発展性、そして看護学部の地域貢献の側面から、学内学会を立ち

上げることが望ましいという結論に至った。

Ⅲ. おわりに

学内学術交流小委員会活動は、教員の看護研究報告会から教員が大事にしている看護研究について語る、「Myプレミアムを語る会」へと転換し、気軽に研究に関して意見交換する場へと発展させた。また、学外学術交流推進小委員会は、2020年度および2023年度にかけ、学内学会発足の必要性について検討をすすめ、学術交流の在り方および学術向上の寄与という視点から意見をまとめた。そして、研究活動広報小委員会では、教員の研究活動の推移について魅力的な広報活動を行っている。それぞれの小委員会は、これまでの活動内容の振り返りを行いつつ、委員会の懸案とされてきた課題に取り組んでおり、これからも学術委員会委員が一丸となって本学部の看護学の学術向上に寄与したいと考えている。

執筆担当

高瀬 佳苗	I, III
佐藤富美子・森 努・林 紋美	II-1
立柳 聡・山口咲奈枝・吾妻 陽子	II-2
川島 理恵・渡邊まどか	II-2